

はじめに

アール・ブリュット インフォメーション&サポートセンター（略称:アイサ）は、障害のある人の芸術文化活動に関わる相談支援活動や人材育成、ネットワークづくり、参加する機会の確保、情報収集・発信などを行っています。2012年6月、社会福祉法人グロー内に開設し、今年度で11年目を迎えました。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大時には、活動や発表の機会が減少しているとの声が多く聞かれましたが、今年度初めには感染症対策を講じて活動が再開され、公演やイベントの開催も増えつつありました。一方で、コロナ禍において寸断されたつながりは戻り切っておらず、昨年度の取り組みのなかでも、参加者同士や出演者と鑑賞者の交流を求める声が多く聞かれました。障害の有無に関わらず、人が芸術文化活動を通じてつながり合う実感が持てるような事業展開をしていくことが求められていると感じさせられました。

また、令和4年度に滋賀県が文化施設を対象に実施した障害者の文化芸術活動等に関する実態調査では「令和3年度からの2年間において、主催または共催で、障害者の造形作品の展示や表現活動を開催した」文化施設は14.3%、「障害のある人に対するサポートや理解に関する研修を実施したことがある」施設は25.7%といずれも低く、文化施設において障害者の芸術文化活動が実施されるような働きかけが必要だと考えられます。

今年度も昨年度に続き、参加者等の交流が生まれ、ネットワークが構築されて次の活動や展開に発展していくことを重視した取り組みを行うこと、それに加えて、文化施設において障害のある人のサポートについて理解が深まることを目指し、事業を計画しました。

本報告書は、アイサが今年度実施した事業について、目的や内容、振り返りを、取り組みごとにまとめています。

本報告書が障害者の芸術文化活動とその支援現場で役立てられることを願っています。

2024年3月

社会福祉法人グロー（GLOW）～生きることが光になる～
アール・ブリュット インフォメーション&サポートセンター

もくじ

はじめに	1
もくじ	2
アイサの事業について	3
<hr/>	
01 芸術活動支援のためのプログラム 	4
「鑑賞サポート研修」	5
「障害特性と鑑賞サポートについて学ぶ」	6
体験研修	
「art space co-jin (アールスペースコージン) の取組から」	7
オンライン研修	8
02 第 20 回滋賀県施設・学校合同企画展 ing… ～障害のある人の進行形～ 	12
03 バリアフリー映画祭 	18
04 音にさわる演奏会 	20
05 障害者の芸術活動に関する訪問調査 	22
06 相談支援 	23
07 情報発信 	24
08 協力委員会 	25
<hr/>	
一年を終えて	27

●本文中の略語について

アイサ：アール・ブリュット インフォメーション&サポートセンター
 支援センター：滋賀県障害者芸術文化活動支援センター*
 施設・学校合同企画展、ing 展：第 20 回滋賀県施設・学校合同企画展 ing… ～障害のある人の進行形～
 実行委員会：第 20 回滋賀県施設・学校合同企画展の実行委員会
 NO-MA：ノーダレス・アートミュージアム NO-MA
 グロー：社会福祉法人グロー（GLOW）

●本文中の表記について

障害福祉サービス事業所等の利用者について、利用者さん、ご利用者、利用者様等、様々な表現があるが本書では利用者に統一

*滋賀県障害者芸術文化活動支援センター

2017 年から「障害者芸術文化活動普及支援事業」（厚生労働省事業）が実施されています。地域で障害のある人が芸術文化を享受し、多様な活動ができるよう支援する体制を全国展開する事業です。アイサを運営する社会福祉法人グロー（GLOW）は滋賀県の障害者芸術文化活動支援センターを担っています。

アイサの事業について

アイサが行う事業には、相談、ネットワークづくり、芸術文化活動に参加する機会づくり、研修会の開催、情報発信という 5 つの役割があります。それぞれの事業がどんな役割りを担っているのかを、各事業の最初のページに下記のアイコンで示しています。



芸術活動支援のためのプログラム



目的

今年度は、「芸術活動支援のためのプログラム」において、鑑賞サポート研修、ボランティア対象研修、体験研修、オンライン研修の4つのプログラムを実施しました。

障害のある人の文化芸術活動を支援する人や関心のある人が、それぞれの事業所等で学びを生かした障害者の芸術文化活動に取り組めるようになること、参加者同士の交流から新たなネットワークが生まれることを目指しました。

開催概要

1 鑑賞サポート研修「障害のある人とともに芸術鑑賞を楽しむために」(全2回)

第1回 作品のバリアフリー化について

日時：9月14日(木) 14:00～16:00

第2回 舞台芸術の鑑賞サポートについて

日時：10月19日(木) 14:00～16:00

会場：あいこうか市民ホール(甲賀市水口町)

講師：山上庄子、蒔苗みほ子(パラブラ株式会社)

参加者：延べ23名

2 NO-MAボランティア対象研修「障害特性と鑑賞サポートについて学ぶ」

日時：10月10日(火) 13:00～14:30

会場：まちや倶楽部(近江八幡市仲屋町)

講師：大平真太郎(グロー福祉事業部長)、山邊まみ、石田瞳(グロー地域共生部)

参加者：6名

3 体験研修「art space co-jinの取組から」

日時：12月13日(水) 13:00～14:15

会場：art space co-jin(京都市上京区)

講師：川上桂、寺岡海(art space co-jin)

参加者：8名

4 オンライン研修

第1回 作品の商品化や販売について

日時：11月24日(金) 14:00～15:30

講師：金武啓子(西淡路希望の家)

安部剛(Good Job! センター 香芝)

第2回 舞台芸術活動支援について

日時：12月21日(木) 14:00～15:30

講師：山浦庸平(大和高原太陽の家)

山口光(認定NPO法人ポパイ)

第3回 美術や舞台芸術の権利について

日時：1月18日(木) 14:00～15:30

講師：平塚崇(北大津きぼう法律事務所 弁護士)

参加者：延べ29名

1 鑑賞サポート研修

「障害のある人とともに芸術鑑賞を楽しむために」(全2回)

この研修では、パラブラ株式会社の山上庄子さんと蒔苗みほ子さんを講師に招き、ゲストとして視覚障害当事者の田中正子さんと聴覚障害当事者の大橋春那さんにオンラインで参加していただきました。

第1回目は、山上さんより、作品のバリアフリー化について学びました。作品のバリアフリー化とは、映画、演劇、音楽などの作品を鑑賞する上で、何らかの困りごとがある人に、バリアフリー日本語字幕や、音声ガイド、舞台説明、事前資料、台本サポートなどの方法で作品を届けることです。

次に、蒔苗さん進行のもと田中さんと大橋さんより、鑑賞をめぐる体験談をお聞きしました。田中さんは、「映画は音声ガイドが付いているものを探して見に行きます。舞台は事前解説を聴いたうえで会場で音声ガイドを聴けば、100%楽しめました」。大橋さんは「鑑賞には字幕のタブレットを使ったりします。字幕付きの作品は日時が選べないことも多いです」など、どのように作品鑑賞を楽しまれているか、また困りごとについてお話を聞くことができました。

第2回目は、グループワークも交えて、作品

へのアクセスや、鑑賞に関わる周辺のサポートについて学びました。

まず、田中さんと大橋さんから劇場での体験談をお話いただきました。作品へのアクセスについては、バリアフリー対応作品検索サイトや、メールマガジンで情報を得ますが、「確認のために実際に劇場に連絡するのは、遠慮する気持ちも出て勇気がいります」というお話もありました。

その後、山上さんより、劇場へ行く前と行った後、それぞれのサポートのポイントについて学びました。webサイトだけでなく、メールや電話、FAXなど様々な連絡手段を準備しておくこと、劇場内では、音声アナウンスやマーク表示などによるバリアフリー対応の明記や、劇場スタッフにおけるサポート内容の共有などがあります。

最後に、研修を通しての学びや感想を共有しあうグループワークを行い、各グループからは「相手の立場に立った思いやりのある対応が大切」「当事者の方がいろいろな作品鑑賞を楽しんでおられることを知れた」といった声が聞かれました。



2 NO-MAボランティア対象研修 「障害特性と鑑賞サポートについて学ぶ」

この研修では、ボーダレス・アートミュージアムNO-MAボランティアスタッフ等を対象として、様々な障害の特性について学び、NO-MAにおける鑑賞サポートの取組を体験しました。会場は、NO-MA企画展「触の祭典『ユニバーサル・ミュージアム さわる!めぐる物語』」の会場の一つ、まちや倶楽部です。

はじめに、大平眞太郎さんより、障害のある人への配慮や対応の基本について、また障害の特性に合ったコミュニケーションの取り方などについて学びました。配慮や対応の基本とは、相手の「人格」を尊重し相手の立場に立って対応すること、困っている方には進んで声をかけるなど、障害の有無に関わらず誰に対しても大切な基本姿勢です。また、障害の特性によって、筆談を使う、抽象的な表現を使わない、体の不調が出た方には休める場所を案内するなど、展示会場に来場された場面を想定しながら具体的な例を学ぶことができました。

次に、山邊まみさんと石田瞳さんより、NO-MAにおける鑑賞サポートの取組について学び

ました。NO-MAの取組には、来館にあたっての事前の質問や相談への対応、点訳や多言語リーフレット、「やさしいことばで読む」などの方法による言語情報の提供、エレベーターや多機能トイレなどのバリアフリー対応があります。また、見る以外の鑑賞方法の提案として、立体コピー技術を用いた触図や音声ガイドの制作に取り組んでいます。

最後は、過去の展示会で制作された触図や、展示会場に設置されている鑑賞サポートツールに実際に触れて体験しました。作品画像と触図を見比べて制作の工夫を感じたり、「やさしいことばのキャプションが読みやすい」など参加者同士で自由に感想を話しながら会場を巡りました。

参加者からは「障害のある方への対応など、不安もありましたが、説明が具体的で分かりやすく、今後の不安が少なくなった」「作品を観賞しやすくする取組に感動を覚えた」「感想を述べあうことで、共感や新たな気づきがあった」という声が聞かれました。

3 体験研修 「art space co-jin (アールスペース コージン) の取組から」

art space co-jin は、2016年に京都市上京区に開設され、障害のある人の作品や表現に出会える場として、展示会の開催や、イベント、ワークショップ、講座などを実施されています。

まず、開催中の展示会「Co-jin Collection - コジコレ - No.7 々」を鑑賞しながら、講師の川上桂さんと寺岡海さんより、各作品の魅力や、具体的な展示方法について学びました。

展示の仕方には、額など使わず生で展示したり額装したりする方法があり、作品の魅力を最大限に引き出すために作品に合わせた展示方法を工夫されていることを学びました。また、作品を生で展示する場合は、作品の角を保護するセロハンと磁石を用いたり、陶器作品の場合はソフト粘着剤で固定したり、作品を保護するための様々な工夫をされていました。参加者は、一つ一つの説明に熱心に耳を傾け、じっくりと作品鑑賞することができました。

次に、寺岡さんより、art space co-jin の取組について話を聞きました。art space co-jin では、年4回程度の企画展開催の他に、作品

のデジタルアーカイブや、設営ボランティア募集といった事業に取り組まれています。企画展の制作にあたっては、作者や支援者にインタビューを行い、制作の様子を知ることから始まります。それらを踏まえて、より作品や表現の魅力を感じてもらうため制作風景のドキュメント映像を作ったり、日々の営みが分かるものを資料として展示したりすることもあるそうです。また、過去の展示会では、魅力的な制作環境が作品制作に影響していると考え、環境そのものを再現して作品を展示することを試みているということでした。

今回の研修では、作者や作品について丁寧に理解し、どのようにしたらその魅力を伝えられるかを考えながら様々な取組を実践されていることを知ることができました。また、参加者からは「展示の仕方、作品の見せ方など、とても参考になりました」「丁寧に作品を扱われていることを学びました」といった声が聞かれました。

4 オンライン研修

第1回 作品の商品化や販売について

第1回は、西淡路希望の家の金武啓子さん、Good Job! センター 香芝の安部剛さんを講師に招き、事例から障害のある人の作品を使ったグッズ制作や、オンライン販売等についてお話いただきました。

はじめに、金武さんから、グッズを紹介しながら、具体的な制作方法や制作までの経緯をお話いただきました。商品はカレンダーや、プラバンを利用した小物ケース、刺繍ポーチ、レターセット、Tシャツやキャップなどその種類は様々です。制作方法は、利用者が描いたイラストを使って職員が縫製するものや、外部デザイナーによるものなどがあります。どれも思わず手に取りたくなる商品ばかりで、利用者とともにユニークな発想で新しいものを作り続けておられる姿勢を知ることができました。

安部さんからは、Good Job! センターの商



品が生まれて販売されるまでを、今回は主に3つの商品についてお話いただきました。メンバー（利用者）と一緒にデザインを考えて制作される張り子、外部ユニットと協働したワークショップで制作されるTシャツ、伝統工芸と福祉が一緒にもつくりするプロジェクトと、制作スタイルもそれぞれで、販売ルートはセンター内にあるストアの他に、オンラインストアや一般店舗での販売があります。どの商品も、いろいろな人と協働するなかで商品展開されたり、新たな販売ルートが生まれたりしてきた経緯があり、様々なつながりの大切さを感じました。

質疑応答では、作者との契約や、商品化の過程や商品の価格設定について、協働先の見つけ方などの具体的な質問があり、さらに学びを深めることができました。

第2回 舞台芸術活動支援について

第2回は、大和高原太陽の家の山浦庸平さん、認定 NPO 法人ポパイの山口光さんを講師に招き、障害のある人の音楽やダンスの活動実践報告についてお話いただきました。

はじめに、山浦さんから、音楽活動「WaNoWa（わのわ）」のお話を伺いました。普段はその時々で参加したいメンバーが活動し、年に数回公演も行われています。ハンドチャイムや、熊笹や廃タイヤを利用した手作りの楽器を使い、思い思いに音を鳴らしてリラックスした時間を過ごすことを大切にされています。決まった音楽でなくても、それぞれのあるがままの表現が一つのものになっていく映像を見ながら、音楽活動を難しく考えすぎず、まずは取り入れやすい楽器を使ってみるなど、活動を始めるためのヒントを覚えてもらえたように思います。

山口さんからは、様々な音楽活動と、「からださがし」という身体表現を紹介いただきました。バンドやダンスの取組では、いろいろな



人と関わることを意識して活動され、障害のある人もない人も一緒に音楽を楽しむ姿が印象的でした。「からださがし」は、それまでの活動に参加しにくかった重度の障害がある方のために始まったワークショップです。観客に発表するためではなく、お互いのからだの動きや空間をじっくり味わい合うことが自然とダンスのようになっていく様子は、また違った魅力を感じることができました。参加者からは活動における場作りについて質問があり、支援者のやってみたくらいという気持ちが大切であること、継続することで活動が定着していくということを知ることができました。

第3回 美術や舞台芸術の権利について

第3回は、北大津さぼう法律事務所の平塚崇弁護士を講師に招き、美術や舞台の作品制作・発表時に関わる権利について学びました。展覧会や演劇上演などの具体的な事例を元に、それらに関わる権利について分かりやすく講義いただきました。

著作者の権利には著作権と著作者人格権がありますが、著作権の基本的な考え方は著作者の利益を得る機会を奪っていないかというこ

とです。それを踏まえて、他人の著作物を利用する際には、許諾を得る努力をすることが大切です。また、舞台芸術においては、脚本や、振付、音楽等の著作権者や出演者の権利である上演権、公衆送信権、録音・録画権等に注意する必要があり、これらはインターネット上での動画配信の際にも関わってきます。その他にも、作品の保管や売買に関わる所有権と著作権の関係や、作品を利用したグッズ制作にも関わる翻案権等についても説明していただき、福祉施設での創作活動においては、作品取扱規程や適切な契約書を作成することが、利用者の権利保護につながることを学ぶことができました。

質疑応答では、意思確認が難しい利用者への許諾の取り方や、アニメキャラクターが描かれた作品の取扱いについて質問があり、日頃疑問や不安に思っていたことにもわかりやすく答えていただきました。

講義を通して、芸術文化活動支援において普段何気なく行っていることも、権利保護の視点で振り返ることができ、表現や発信の方法も多様化しているなか、様々な権利について学ぶ貴重な機会となりました。



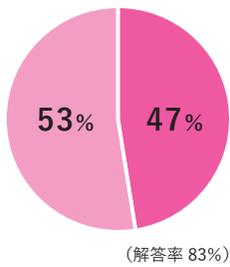
アンケート結果

■ とてもよい ■ よい ■ ふつう ■ 無回答

1 鑑賞サポート研修 第1回～第2回

具体的に気づきや学びになったこと

- 「障害は個人ではなく社会にある」という言葉に感銘を受けた。
- 視覚障害者、聴覚障害者の方のお話を聞く機会はほとんどなかったもので、大変勉強になった。作品の世界に入り込んでいけるようなサポートの大切さを痛感しました。
- やはり実際に当事者の方々からお話を聞けるのは、あらゆることに気づかされることが多い。



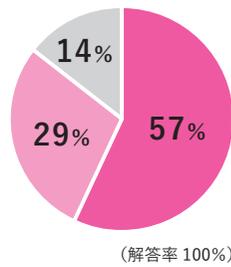
今後の取組に繋がれそうなこと

- 台本サポート、事前(幕前)での説明など。YouTubeでの事前準備。
- オンラインチケットの改善、問合せ窓口(手段)を多く用意する。

2 障害特性と鑑賞サポートについて学ぶ

具体的に気づきや学びになったこと

- 障害のある人への配慮についての話は分かっているようでいて、再認識したことも多くとても勉強になりました。
- NO-MAで行われている視覚に頼らず鑑賞することの試みが本当に面白く、今まさに取り組み続けておられるところなのだとワクワクしましたし、ボランティアスタッフとして、ふれて感じ、ふれて考える楽しさを鑑賞者の方と一緒に楽しめる展示期間にできればと思います。



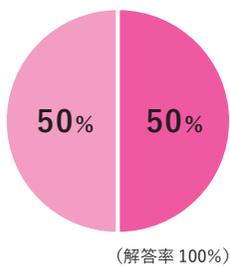
今後の取組に繋がれそうなこと

- 会場に足を運んでくださった方々に、少しでも楽しんでいただけるようなご案内をする。作品解説を読んでもいただくことをおすすめしやすくなった。

3 体験研修

具体的に気づきや学びになったこと

- 作品に合わせた展示の方法など、実践してみようと思います。
- 展示方法の知識が全くなく、試行錯誤している日々だったので「なるほど!こうすればきれいに見えるんだ」と行き詰っていたことに納得できた研修でした。
- 展示会、展示内容に合わせた展示方法の例を伺え、大変参考になりました。



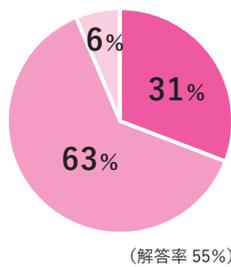
今後の取組に繋がれそうなこと

- 展示方法など、細かいテクニックが参考になった。
- ご本人や家族とコミュニケーションをもっと取っていききたいと思います。

4 オンライン研修 第1回～第3回

具体的に気づきや学びになったこと

- 商品化する際のアイデアを学ぶこと、また発見があった。
- 地域との連携が商品作りのアイデアになるということ。
- 間違いのない音楽、あるがままで良い、受け入れるという心持などのフレーズが印象に残った。
- 舞台や芸術という垣根が高く、自分なんて恥ずかしいなと思っていたのですが、普段の利用者との関わりの延長なのだと思うと親近感がわきました。
- 著作権に関する捉え方が勉強になりました。
- 著作者の儲けるチャンスを奪っていないかという目線で考えるとわかりやすいと勉強になりました。



今後の取組に繋がれそうなこと

- 利用者の方の特性を活かした作品作りを考えていきたいです。
- ハンドベルがあるが、うまく演奏できないので片付けたままであったが、使ってみようと思う。

研修振り返り

今年度は、鑑賞サポート、ボランティア対象、体験、オンラインの4種、計7回の研修を実施しました。

鑑賞サポート研修は、糸賀一雄記念賞第二十二回音楽祭の会場である、あいこうか市民ホールで実施しました。音楽祭のスタッフとなるホール職員に多く参加いただき、研修の成果や効果をイベント当日に感じることができたのではないかと考えます。鑑賞サポート研修では、毎年、障害当事者の生の声が聴けるよう、講師として参加いただいています。今年は、日ごろから映画や公演を多く楽しまれているお二人ということもあり、具体的な楽しみ方、困りごとを聞くことができました。また、研修にグループワークを組み込んだことで、参加者同士の交流の場ともなりました。合理的配慮の義務化に伴い、鑑賞サポートの研修に対するニーズはますます増える可能性が考えられます。多くの文化施設スタッフに参加いただけるよう、研修の実施と周知を強化する必要があると考えます。

NO-MAのボランティアスタッフを対象に開催した障害特性と鑑賞サポートを学ぶ研修は、イベントや展覧会を主催するスタッフではなく、普段は鑑賞者として展覧会に来る立場の人にも「鑑賞サポート」について周知する機会となりました。今回は参加者を限定した研修だったため、参加者数はあまり多くありませんでしたが、少人数だからこそ、参加者同士で意見交換をしながら実際の展示会場で鑑賞サポートを体験し、交流の機会をもつことができました。今回の研修は、例えば博物館スタッフや企業

など、対象を広げて開催することもできる内容となったように感じています。

art space co-jinでの体験研修は、展示をするときの作家や作品の選定から、調査、展示方法などをトータルで学べる研修となりました。これは、co-jinのスタッフの皆さんが作家や作品を大切に、その魅力を伝える展覧会を開催されているからこそ、その経過や事例をお話いただくことで、学びにつながったと考えます。また実際の展覧会を見ることは、参加者それぞれの取り組みに引き寄せた学びにつながったように感じています。体験を取り入れた研修は今後も実施したいと考えます。

作品の商品化と販売、舞台芸術活動支援、権利について学ぶ研修は、福祉施設スタッフの参加のしやすさを考え、オンラインで実施しました。県内だけでなく県外からの参加もあり、直接対話するだけでなくチャット機能を活用して質問がされるなど、オンラインの良さを活かした研修となりました。一方で、昨年度のオンライン研修と比べ、参加者は少し減少しました。周知不足も原因のひとつではありますが、内容により対面や体験型が望まれるものもあるように感じました。

今年度実施した研修は、アンケート結果からもニーズに合う内容の研修を実施できたと考えます。次年度も、オンラインや体験、対面の研修など、開催方法も併せて検討し、ニーズに沿う研修を実施することが必要だと考えます。

第20回 滋賀県施設・学校合同企画展 ing…～障害のある人の進行形～

目的

本展は、県内の障害福祉施設の支援員や特別支援学校の教員等と、ボーダレス・アートミュージアムNO-MAが実行委員会を組織し、企画から展示までを行う展覧会です。障害のある人の日々の生活に寄り添う支援者ならではの目線で、作者個人の表現や作品の魅力を引き出す展示を構成します。

障害のある人の日常から創造される作品を発表する機会を生み出すことや、造形活動を担当する支援員および教員の交流を図ることで、より質の高い支援を行えるようになるとともに、本展の取り組みを発信することによって、障害のある人の芸術活動への社会の関心を高めることを目的としています。

開催概要

前期：2023年（令和5年）12月23日（土）～2024年（令和6年）1月28日（日）

後期：2024年（令和6年）2月3日（土）～3月3日（日）

会場：ボーダレス・アートミュージアムNO-MA

出展施設：〔前期〕あうとリーち和泉／伊香立の杜 木輝／近江学園／湖南ダンスワークショップ実行委員会／滋賀自閉症研究会たんぼぼ／信楽青年寮／社会就労センターあおぞら／じょいなす／ステップアップ 21／第2ももスマイル／つつじ作業所／ひのたに園／ふくらの森

〔後期〕愛育苑／えがお／kama-moto／きみいろ／甲賀福祉作業所／信楽学園／障害者支援事業所いきいき／せいふう／第二出会いの家／能登川作業所／発達支援教室 ichi5／バンバン／瑞穂

協力施設：アトリエひこうきぐも／祇王小学校／にっこり作業所

アドバイザー：野原健司（美術家）

※五十音順、敬称略

出展者：28名と2組

総入館者数：1,087名

イベント：

●ギャラリートーク & 制作公開

前期：2023年（令和5年）12月23日（土）13:30～16:00 参加者：30名

後期：2024年（令和6年）2月3日（土）13:30～16:00 参加者：33名

●常設ワークショップ

- 架空の地図をつくろう（前期）
- しがらきのたぬきを描こう（前期）
- オリジナルの紙バッグをつくろう（後期）
- 写経をしてみよう（後期）
- オリジナルの織物を織ってみよう（後期）

振り返り

今年度は、県内福祉施設や小学校、地域の造形教室等の29施設が参加し、28名と2組の作者による作品を紹介する展覧会となりました。本展覧会に出展するのが初めての作者や施設の参加もあれば、過去に参加していた施設や委員の再参加などもあり、あらたな障害のある人の作品の魅力を発信する機会となりました。

滋賀県施設・学校合同企画展では、障害のある人の作品を展示するだけでなく、実行委員会で展覧会を作るプロセスを学びながら、所属を超えて支援者同志のネットワークをつなぐ場になることも目的のひとつとしています。2023年7月～2024年3月にかけて開催した実行委員会では、それぞれの現場で生まれる多種多様な表現や作品の魅力について話し合いながら、展示する場所や展示方法等の協議を重ねました。

第3～5回実行委員会で行った展示協議では、「こんなふうに展示をしたい」とイメージされている委員や「どのように展示するのがいいかわからない」と戸惑われる委員もいて、お互いの経験からいろいろな意見を交わして展示を考えました。本展のアドバイザーで美術家の野原健司さんや、NO-MA学芸員からのアドバイスも踏まえ、展示台の高さや額の色など、細部も含めて検討を重ねていきました。実際の展示では、協議を重ねてイメージした図面を基に、作品や照明の位置、同フロアの他作品との調和なども互いに考慮しながら展示し、展

覧会をつくりあげました。

第6回実行委員会では、「やさしい作品ガイド」を作成するグループワークを行いました。「やさしい作品ガイド」とは、NO-MAで鑑賞される多様な人に向けて、作者や作品の情報をやさしい日本語やわかりやすい表現を使って紹介したガイドのことです。グループワークでは、事前に各委員が作成した会場キャプションを基に、誰もがわかりやすい表現について考え話し合いました。参加した委員から「他の委員の意見を受け、作者の表現についてより考える機会になった」などの感想がありました。

展覧会のオープニングイベントでは、ギャラリートークとともに作者の制作公開を行いました。ギャラリートークの話を受けて、鑑賞者から実行委員に作品の出展交渉があったり、作者のご家族から「普段とは違う様子を垣間見ることができた」と感想が聞かれ、作者にとって次につながるきっかけになりました。

展示を終えて委員の感想を伺うと、「展覧会を作りあげるうえで、いろいろな配慮が必要であることを知れた」「他施設の展示方法や作品制作の過程などを知ることができ、勉強になった」「作品や作者について、もっと話し合う機会がほしい」などの声が聞かれました。

NO-MA開館年から毎年開催し今年で第20回を迎えましたが、創作を通じた支援を深めるため、今後も作者の表現についてともに語り合える機会を作っていく重要性を感じました。

実行委員会実施概要

県内 29 か所の障害福祉施設や小学校の職員、任意団体のメンバー、地域の造形教室の講師とボーダレス・アートミュージアム NO-MA が月 1 回の実行委員会に集い、展示の構成等について考えました。アドバイザーや NO-MA 学芸員らがサポートに入りながら、展示プラン作りから設営まで、すべて実行委員たちの手で行いました。

第 1 回



2023年7月6日(木)

- 実行委員、アドバイザーの紹介、開催要項等の説明、実行委員長・副実行委員長の選出

第 2 回



© 辻村耕司

2023年8月9日(水)

- 出展作品の鑑賞、各グループでの作品鑑賞・感想の共有

第 3 回



2023年9月6日(水)、7日(木)

- 各グループで関連イベント、図録内容、展示構成についての協議

第 4 回



2023年10月11日(水)、12日(木)

- 展示構成の協議、展示イメージ案の作成

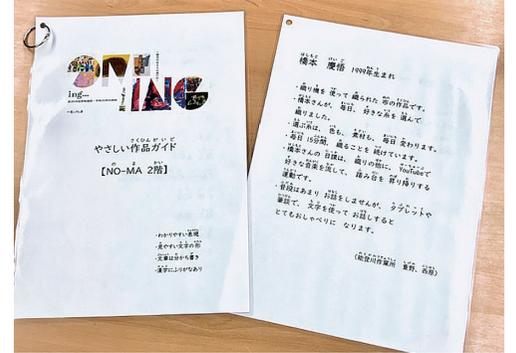
第 5 回



2023年11月8日(水)、9日(木)

- 展示イメージの最終案の作成

第 6 回



2023年12月13日(水)

- 前期と後期の展示内容の共有、関連イベントの最終確認、グループワーク（やさしい作品ガイド作成）

展示設営



前期：2023年12月20日(水)、21日(木)
後期：2024年1月31日(水)、2月1日(木)

搬出



前期：2024年1月29日(月)
前期：2024年3月4日(月)

第 7 回



2024年3月7日(木)

- 開催報告、振り返り

展示風景
(前期)



展示風景
(後期)



バリアフリー映画祭

目的

芸術文化を鑑賞する機会の創出を目的とし、障害の有無にかかわらず誰もが楽しめる映画鑑賞体験となるよう、様々な鑑賞サポートを実施し、バリアフリー映画祭を開催しました。



開催概要

2023年8月19、20日の2日間で映画5作品を上映、また関連イベントとして点字を学ぶワークショップと映画監督によるアフタートークを行いました。上映する5作品すべてをバリアフリー日本語字幕付きで上映し、音声ガイド機器の貸し出しを行いました。

鑑賞サポート

- バリアフリー日本語字幕：セリフだけでなく、話者名や効果音、音楽など、耳で聞こえる音声情報を文字化した字幕がスクリーンに表示されます。
- 音声ガイド：場面や登場人物の動きなど、目から入る情報を言葉で説明したナレーション。本映画祭では、UDCast方式に対応しています。
- 情報保障：監督トークの際、手話通訳と、UDトークによるトーク内容の文字サポートを実施しました。
- 客席：会場内はすべて自由席で、いすの移動が可能となっているため、車いすの方もほじょ犬をお連れの方も好きな席で鑑賞できます。
- その他：ご要望に応じて、最寄り駅から会場までの誘導を行います。

スケジュール

8月19日(土)

10:30 ~ 12:00 点字ワークショップ「身の回りにある点字を調べよう」

13:30 ~ 映画「ぼくらのよあけ」上映

16:10 ~ 映画「子供はわかってあげない」上映

8月20日(日)

10:30 ~ 映画「ゆめパのじかん」上映

13:30 ~ 映画「東京干潟」/「蟹の惑星」上映

16:25 ~ 17:25 「東京干潟」/「蟹の惑星」村上浩康監督トークイベント

振り返り

「バリアフリー映画」や、「鑑賞サポート」と聞くとあまり馴染みのない言葉に少し身構えてしまうかもしれません。しかし、実際に上映すると、障害の有無にかかわらず、「字幕があったことで、より内容を理解することができた」、「音声ガイドの説明があることで（映画の内容が）わかりやすかった」といった声が聞かれました。このように、バリアフリー映画は誰にとっても映画鑑賞をより楽しむツールになっているのではないかと感じました。

今回の映画祭では、映画上映だけでなく、関連イベントとして、点字を学ぶワークショップと監督トークを行いました。

点字を学ぶワークショップでは、滋賀県視覚障害者福祉協会協力のもと、日常生活のなかの目が見えない、見えにくい人への工夫を知ると同時に、実際に点字を打つ体験も行いました。日用品だけでなく、会場の施設内や駅構内を実際に歩いて見てまわり、触って体験しました。普段生活しているなかで、どのような工夫があるか、気づく機会となりました。参加者からは「点字を見ることはあったが、打ったのは初めてだったので楽しかった」「横断歩道にも点字ブロックがあることを知って驚いた」など楽しんで学ぶ機会になったのではないかと



点字を打つ体験の様子



映画祭での監督トークの様子

思います。

監督トークでは映画「東京干潟」「蟹の惑星」の村上浩康監督に登壇いただき、映画のお話や、映画の制作について聞くことができました。また、監督トークでも手話通訳や、文字サポート（UDトーク）を活用しました。「（監督トークを聞いて）現代の社会について考え直すきっかけになった」、「難聴気味のため、文字サポートがわかりやすくてよかった」といった声も聞かれました。

2日間で延べ60人の方が参加された、今回の映画祭は、「バリアフリー映画」というものを知っていただく機会になりました。アンケートでも、「このような取り組みを初めて知った」「今後も継続してほしい」といった声が聞かれました。しかし、障害のある方の参加は全体の1割程度で、障害当事者への周知は今後の課題だと感じました。もちろん、取り組みを知っていただくことも大切ですが、当事者に情報が行き届くことも大切です。今後もこのようなバリアフリー映画の上映を続け、周知をはかると共に、より当事者に情報が行き渡るような工夫をしなければならぬと、感じる映画会となりました。

アイサでは今後も映画鑑賞だけでなく、様々な芸術鑑賞における情報保障や鑑賞サポートのニーズを図りながら、障害の有無にかかわらず芸術文化活動を楽しむ機会を創出していきたいと思っています。

音にさわる演奏会

目的

ボーダレス・アートミュージアム NO-MA 企画展「触の祭典『ユニバーサル・ミュージアム さわる!めぐる物語』」の関連イベントとして、出展作品である陶の音具「土の音」を使った演奏会と、その音具をみんなでさわって、音を奏でるワークショップを実施しました。「音にさわる演奏会」と称した演奏会とワークショップでは、音を聴覚だけで楽しむのではなく、音具に触れたり音を鳴らしたりすることで、音の響きを多様な感覚を通して体感し楽しむ機会になることを目的としています。

開催概要

日時：2023年11月4日(土) 14:00～16:00
 場所：酒遊館（滋賀県近江八幡市仲屋町中6）
 内容：14:00～15:00 演奏会
 15:10～16:00 ワークショップ
 講師：永田砂知子氏（打楽器奏者）、渡辺泰幸（造形作家）
 参加者：37名



振り返り

「音にさわる演奏会」では、最初に講師の永田さんによる音具「土の音」を使った、パフォーマンス演奏が行われました。長い棒状の音具（レインスティック）を左右に揺らして音を奏でながら登場し、次にお椀型の音具のふちをすりこぎで擦って音を出しながら、同じ音をもう一人、さらにもう一人が奏でて、いくつもの音の響きが生まれました。その響きは心地よい倍音（ある音を鳴らしたときに自然に発生する音）になり、目を閉じながら耳を澄ましてじっくり聴く人やクスクスと笑いながら聴いている人もいました。視覚に障害のある人も参加されていて、演奏中、膝の上で手のひらを広げ、音を受け止めるような姿勢で聴いておられ、それぞれの感覚で音を楽しむ様子が伺えました。その後も、いろいろな形をした音具を手やバチで叩いたり、転がしたり、撫でてみたりと様々な手法で演奏されました。さわる位置や力の入れ具合で音が異なり、酒蔵を改修した会場と相まって奥深い音の響きを体感しました。演奏後のトークで、先ほどクスクスと笑って聴いていた人に感想を伺うと、「なんか、リラックスできる音でおかしかった」と述べられ、永田さんをはじめ聞く感想で興味深く思ったようでした。トークの中で、本展監修者の広瀬浩二郎さんが仰った「日常と非日常を分けず、つなげてほしい」という言葉のように、演奏中には椅子の音、柱時計の音やバイクの排気音など、ノイズ音といわれる音も許容し、あらゆる音の魅力を感じることが出来た演奏会でした。

音具の説明を聞いた後、演奏会で使った音具を参加者と一緒に奏でるワークショップを行いました。まず永田さんから参加者に声をかけて、グループを作り演奏をしていきました。永田さんから呼ばれた子どもたちは少し緊張した面持ちでしたが、バチで叩いている色々な音を奏でるうちに緊張もほぐれ、楽しい音のセッションが生まれました。次の参加者にはペアを組んでいただき、お椀型の音具を使って音を奏でていただきました。自分の音を確認して、次に相手の音を確認して、音の呼吸を見ながら徐々に波長を合わせ、新たなセッションが生まれました。以前にも「土の音」のワークショップに参加されたことのあるご家族には、永田さんからテーマを決めて演奏することが提案されました。マイペースに奏でる息子さん、そんな様子にアイコンタクトを送るお父さん、慌ただしく奏でる娘さん、最後は自分のペースで奏でるお母さん。「浪本家の朝」というテーマで、ご家族の朝の情景が浮かんでくるセッションになりました。その後は、参加者全員で音具を奏で、音の響きを体感しました。

あらゆる音の響きを通して、多様な感覚を使い「音にさわる」ことが出来た楽しい一日となりました。

障害者の芸術活動に関する訪問調査

目的

障害のある人の芸術活動に関する実態やニーズを把握するとともに、障害者の芸術文化活動に関する情報を収集しネットワークを広げるため、今年度も訪問調査を実施しました。2020年度から継続してきた舞台芸術分野の調査とともに、今年度は、造形活動に取り組んでいる福祉事業所等の調査も行いました。県が実施している造形活動に関する調査等を元に、継続して活動に取り組んでいる事業所や、新たに活動を始めた事業所を訪問することで、県内における造形活動の現状を把握し、今後の事業計画に反映させることを目指しました。

あわせて、県内の文化施設や、ギャラリースペース、絵画教室への訪問も行いました。これまでアイサで蓄積してきた芸術文化活動に関する情報について、担当者や関係者と直接出会って話を聞くことで、相談支援における効果的な対応や、アイサの活動の周知、ネットワークの構築による新たな事業の展開につながると考えています。

実施概要

調査対象：芸術文化活動に取り組む障害福祉事業所・団体、文化施設・絵画教室等
 調査内容：活動の実態 / 活動上の課題 / 施設の活用状況
 調査数：10 団体
 文化施設等訪問数：9 施設

訪問調査先（芸術文化活動に取り組む障害福祉事業所・団体）

1 就労継続支援 B 型事業所 ShakeHands	大津市	2023年6月28日（水）
2 特定非営利活動法人 IL 逢坂福祉会 IL Garden	大津市	2023年6月28日（水）
3 医療法人遙山会地域生活支援センターまな	彦根市	2023年7月3日（月）
4 アートマネジメントグループ m-fat（モファ）	守山市	2023年7月10日（月）
5 社会福祉法人湘南学園障害福祉サービス事業所れもん会社	大津市	2023年7月10日（月）
6 障がい福祉サービス事業所ふれあいワーカーズ	野洲市	2023年7月10日（月）
7 一般社団法人 no-de（ノード）アトリエヲト	草津市	2023年7月13日（木）
8 合同会社ケアステーション Pina 生活介護ぴ〜す蕪株式会社	野洲市	2023年7月13日（木）
9 スキップハート	近江八幡市	2023年7月15日（土）、22日（土）
10 特定非営利活動法人陽だまり	野洲市	2023年7月21日（金）

相談支援

2023年度相談支援活動実績（2023年4月1日～2024年2月29日）

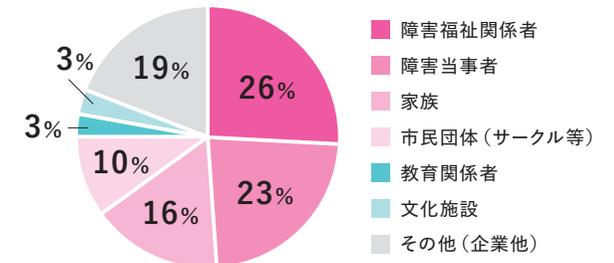
相談件数
31件

相談回数
117回

●相談者別（件数）

障害福祉関係者（障害福祉サービス事業者、当事者団体等）	8
障害当事者	7
家族	5
市民団体（サークル等）	3
教育関係者	2
文化施設	1
その他（企業他）	6

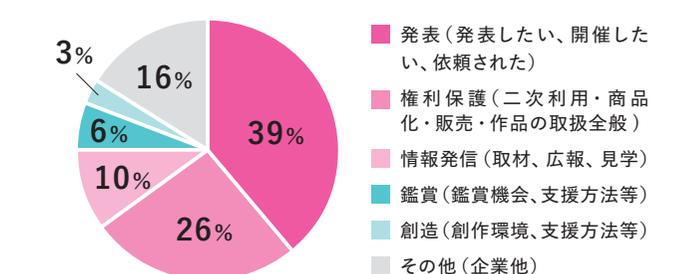
●相談者種別



●相談内容別（件数）

発表（発表したい、開催したい、依頼された）	12
権利保護（二次利用・商品化・販売・作品の取扱全般）	8
情報発信（取材、広報、見学）	3
鑑賞（鑑賞機会、支援方法等）	2
創造（創作環境、支援方法等）	1
その他	5

●相談内容別



今年度は、2月29日時点で31件の相談活動を行いました。内訳でみると、ここ数年変わらず、障害福祉関係者、ついで障害当事者や家族からの相談が多く、発表の機会や権利保護に関する相談が多く寄せられています。また今年度は、企業から障害のある作家の情報を求める相談や、パフォーマンス団体の紹介を求める相談も寄せられました。公募展等発表の機会についての情報や助成金の情報は、ウェブサイトへ掲載するとともに、相談者のニーズに応じて定期的に情報提供することで、相談者とのゆるやかなつながりが生まれています。過去

に相談があった方からその後の活動状況をお知らせいただいたり、ボーダレス・アートミュージアムNO-MAのボランティア参加につながったりという事例もありました。

また今年度は、訪問調査にあわせて文化施設や絵画教室の訪問、情報収集も目標として掲げました。地域資源や人材等の情報を収集することも、様々な相談に対応するために必要なことだと考えています。今年度収集した情報をスタッフ間で共有しやすく情報整理するとともに、継続して調査を実施し、情報を蓄積、更新していきたいと思っています。

情報発信

ホームページ、メールニュースでの情報発信 (2023年4月1日～2024年2月29日)

●ホームページ掲載記事数・アクセス数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	計
記事数	13	6	18	13	14	7	10	20	3	19	10	133
アクセス数	1,533	1,776	2,345	2,291	2,481	2,105	1,593	1,481	1,362	1,940	1,696	20,603

※ 2022年4月1日～2023年3月31日実績 掲載記事数：142、アクセス数：20,253

●掲載記事（カテゴリ別）

アイサからのお知らせ	14
イベント・展覧会情報	66
公募情報	33
助成金情報	14
研修・調査等レポート	6
計	133



アイサウェブサイト <http://info.art-brut.jp>

●メールニュース：

1回/月

今年度もアイサに届くイベントや公募情報、助成金情報、各関係団体から掲載依頼のあった情報などをホームページで発信しました。2019年度からアイサのホームページの周知と活用を目指し、定期的な情報発信に力を入れてきましたが、ここ数年は一定のアクセス数があることから、芸術文化活動のための情報収集に一定数アイサのホームページが活用されているのではないかと思います。掲載情報をもとに鑑賞サポートに関する相談が寄せられたり、発表の機会に関する相談をきっかけに、後日相談者から個展開催のお知らせをいただいて掲載できた例もあり、相談支援においてもホームページの活用は欠かせないと感じています。その他にも、助成金情報を知りたいという相談が毎年見られることから、昨年度からホームページに助成金情報のカテゴリを追加して発信しています。当初は助成金情報の収集不足も

あり、数件しか記事掲載できませんでしたが、今年度は積極的に情報収集を行い発信しました。今後も、芸術文化活動支援において求められる情報は何かを常に考えながら、積極的な情報収集と発信を行っていきます。

メールニュースでも、引き続き事業でつながった個人・団体等へ月に1回程度、アイサの研修やイベント案内を配信しました。定期的なメールニュースの配信は、県内における障害者の芸術文化活動への関心を高めるためにも効果的だと考えます。

ホームページ等以外でも、リーフレットを活用した情報発信を行いました。今年度新たに訪問調査を行った福祉事業所、芸術文化活動団体、文化施設等に、訪問時にリーフレットの配架を依頼しました。直接リーフレットの説明を行うことで、担当者への周知とともに障害のある方本人へ情報が届くことを目指しました。

協力委員会

アイサでは協力委員会を設置し、

滋賀県障害者芸術文化活動支援センターの実施事業について助言をいただいています。

今年度は教育、文化、福祉等の分野から6名に委員を務めていただきました。

委員会では事業計画や評価指標に対する意見交換と、

実施した事業の評価を行っています。

また、今後のアイサの役割に期待することや方向性に関するご意見もいただき、

長期的な視点でアイサのあり方を改善していくために欠かせない場となっています。

委員紹介

2023年度協力委員

上村 秀裕（甲賀市あいこうか市民ホール）

小石 哲也（社会福祉法人共生シンフォニー まちかどプロジェクト 「まちプロ一座」）

田中 孝史（チームエンパワーメント）

田中 好美（精神障害者地域生活支援センター風）

馬場 功（滋賀県立八日市養護学校）

藤野 裕美子（美術作家）

実施概要

第1回 2023年7月18日（火）オンライン開催

第2回 2024年2月13日（火）

場所：草津市立市民交流プラザ フェリエ南草津 中会議室



滋賀県施設・学校合同企画展 (ing 展) について

委員

初めて参加する委員もいるなかで、長年参加している委員を中心に経験のある委員がアドバイスしている様子があった。それぞれの委員が展示プランを言いやすい雰囲気の委員会だった。

アイサ

コロナ禍を経て実行委員会の持ち方も変化している。特に、展示協議の日程を前期と後期で分けて行うことが話しやすい雰囲気につながっているのではないと思う。

研修について

□オンライン研修

委員

ZOOM での研修でどこまで学べるのだろうかという気持ちがあったが、講師が作品の魅力について語っている姿が印象的だった。スタッフが楽しみ、利用者も楽しんで作っている作品が商品化につながっているのではないかと感じた。講師の施設それぞれに特色があり、作品に魅力を感じている点は同じだがそれぞれ発信の方法が異なっていた。(第1回)

委員

講師2人のようにアイデアのあふれる人材がいることがわかった。外部の人やお客さんを巻き込んで活動されているのがおもしろいと思った。(第2回)

委員

どのような活動にも権利関係の話はついてくるもの。作品制作や舞台芸術においても様々な権利がある。学んでいかなければいけないと感じた。(第3回)

アイサ

ZOOM での研修が活発になり、県外の講師や受講者が参加しやすくなったというメリットがある反面、オンラインではなく対面の方が学びやすい研修もある。また、権利に関する研修は需要があるという意見がある反面、なかなか人が集まらない結果となった。周知の方法については今後も検討すべきであると感じた。

□鑑賞サポート研修

委員

2024年4月から合理的配慮の提供が義務化されるということもあり、関心が持たれている内容ではある。しかし、参加へつなげるアプローチが難しいと感じた。受付対応やウェブアクセシビリティ

ティなど、興味の持ちやすいテーマを設定し、あわせて鑑賞サポートがあることで、施設利用者の増加につながるということに気付いてもらえればと思う。

アイサ

文化施設関係者にとって興味のある内容ではないかと考えていたがあまり参加いただけなかった。事務局として発信力の弱さを痛感した。

次年度に向けて

委員

研修などから学んだことを生かして芸術文化活動につながればよいと思う。できあがった作品などを発表する機会を作っていきたい。

委員

協力委員だけで何かをするのではなく、協力委員の周りの人を巻き込んで、輪が広がるような仕組みができるとうい。

委員

まだ知られていない活動が県内にはあり、やる気がある人があつて何かをしたいという気持ちを持っている人はたくさんいる。そういった人同士や、活動をつなぐような役割を担っていきたい。

年度初めはまだ少し聞かれた「コロナの対策をして……」という言葉も、年度の途中からは徐々に聞かれなくなり、言葉にせずとも対策を講じたイベントが開催されるようになりました。調査に行ったいくつかの団体からも、コロナ前の公演数には戻っていないものの、コロナ禍にくらべると増えたという声が聞かれたり、2～3年ぶりに再開されたイベントや、オンラインから会場公演に変わったイベントもあつたりと、今年度は取り組みが活発に行われていたように思います。

アイサではここ数年、年度初めにスタッフで集まり、現状や課題を共有し、今年度はどんなことを目標にどんな事業を実施するか、検討会議を行っています。数年アイサの事業に携わっているスタッフもいれば、今年から関わることになったスタッフもあり、それぞれの視点で意見を出し合っ事業を計画します。

ここ数年特に力を入れているのは、「人と人とをつなぐ」「交流の場を設ける」ことです。今年も、年度初めの状況から、コロナ前の様なつながりが戻るよう、また、新たなつながりが生まれるよう、交流の場を作ることを意識しながら事業に取り組みました。

特に今年度は、新たなネットワーク構築を目的に、県内の様々な団体の訪問調査を行いました。今年すぐ一緒に何かを、ということにつながったわけはありませんでしたが、それぞれの団体がどんな取り組みをしているかお伺いし、またアイサの取り組みを共有できたこと、そして、今後も引き続きお互いの取り組みを共有しあうことで、次年度の取り組みにつなげていきたいと考えています。

また、文化施設へのアプローチとして、鑑賞サポートの研修を実施しました。研修を企画するにあたっては、会場である文化施設職員に参加しやすい日程や内容について相談しながら、講師と共に検討しました。文化施設において障害のある人の公演が行われたり、障害のある人の鑑賞機会が増えたりするために、文化施設が課題に思っていることや学びたいことをヒアリングしながら研修等を実施すること、また、文化施設と協働した取り組みを行っていくことが必要だと感じました。

今年度の取り組みで得た情報や実施後の振り返りをもとに、今までのつながりと、新たなつながりを作りながら次年度も障害のある人の芸術文化活動に関わる人のニーズに沿った取り組みを実施していきたいと考えています。

最後になりましたが、本事業の実施にあたりご協力いただきました皆様へ心よりお礼申し上げます。

令和5年度アイサ事業報告書

2024年3月31日発行

[制作・発行]

アール・ブリュット インフォメーション&サポートセンター
社会福祉法人グロー（GLOW）～生きることが光になる～
法人事務局地域共生部

〒521-1311 滋賀県近江八幡市安土町下豊浦 4837-2

TEL：0748-46-8118 FAX：0748-46-8228

E-mail：artbrut_info@glow.or.jp

WEB：http://info.art-brut.jp

[発行責任者]

牛谷正人（社会福祉法人グロー（GLOW）理事長）

[執筆]

松井裕紀、橋本悦子、藤田爽乃、井上敬子
（社会福祉法人グロー（GLOW）法人事務局地域共生部）

[デザイン]

早瀬衣里子

[助成]

令和5年度障害者芸術文化活動支援センター運営費補助金（滋賀県）